

ぬりえずかん

世田谷で冬にも見られる生きものをご紹介します。よく観察して、色を付けてみてください。



ジョウビタキ(オス)：〈ヒタキ科〉

- スズメ大の冬鳥で、中国や朝鮮半島、シベリア南部で繁殖し、世田谷区内では晩秋から春先まで、川沿いの空き地や遊歩道、畑地の残る地域などで見られます。
- なわばり意識が強く、1羽ごとにテリトリーを持つため、一度見つけると、飛び去っても待っていれば、また戻ってきます。「ヒッヒッ」という声でなわばりを主張します。
- オスは華やかな色彩(腹：オレンジ色、頭：灰色、顔のど背など：黒)、メスは頭から背は灰褐色。

ぬりかたのコツ 2

- ①黄土色を軽く塗ります
 - ②次に紫色で軽く塗ります
 - ③群青色で塗ってティッシュペーパーで、こすります。
- ※注意するのは、背中中の「光った部分」には色を付けないこと
こうすれば、
光沢が際立ちます。



ぬりかたのコツ 1

- ジョウビタキの黒色部分には
- ①茶色を軽いタッチでまんべんなく塗り、その上をティッシュペーパーで、こすります。
 - ②その上から紫色をのせて、ふたたびティッシュペーパーでこすります。
- ①と②を何回か繰り返すと、
深見のある黒色になります。



オカダンゴムシ：〈ワラジムシ目(等脚目)〉

- 敵に会うと体を腹側へ丸めて球のようになり身を守ります。
- 冬の間は、落ち葉や石、植木鉢などの下で集まって冬越しします。
- 住宅地や公園で見られ、子どもから大人まで知っているポピュラーな生きものですが、明治時代頃にヨーロッパからやってくるまでは、日本にいなかったようです。
- 落ち葉や朽ち木、小動物の死骸やふんなどを食べる“自然の掃除屋さん”。自然界における「分解者」の役割をしています。

細密画：松原 巖樹 先生

1935年東京生まれ。一般社団法人日本理科美術協会名誉会長。
一貫して生物画を描き続ける。図鑑・事典などの生物画ほか、生物を題材とした児童向けの絵本など多方面で活躍している。

松原先生は、身近な自然からのメッセージを細密画として表現する「ネイチャーアート」の講座を、当財団で何年にも渡り実施くださいました。ご興味のある方は、ぜひ、書籍「ネイチャーアート入門」*をご覧ください。

*発行：一般財団法人世田谷トラストまちづくり